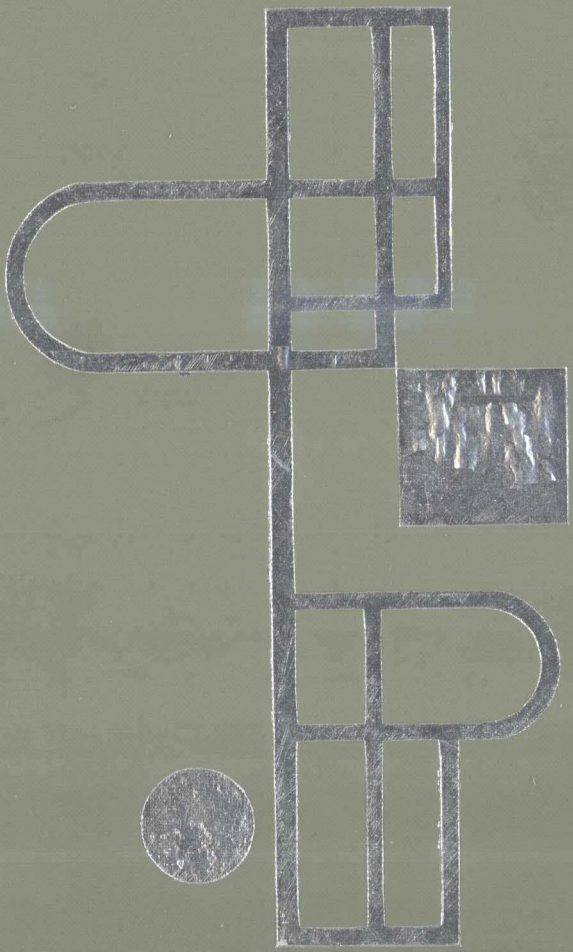
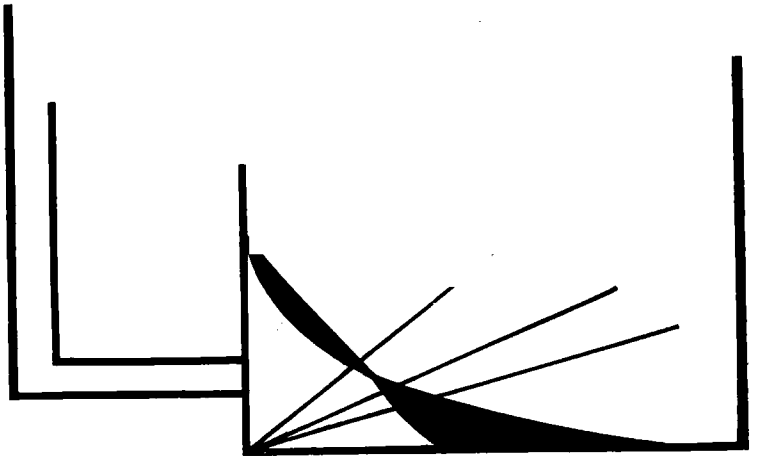


平林たい子集

新選 現代日本文學全集

18



筑 摩 書 房 版

新選 現代日本文學全集 18

平林たい子集

昭和三十四年六月十日 発行

著者 平林たい子

東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行者 古田晁

東京都青梅市根ヶ布三八五

印刷者 山田一雄

東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑摩書房

〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)

振替 東京 一六五七六八

製本 株式会社高陽堂 印刷 株式会社精興社 整版 株式会社精興社

平林たい子集　目次

砂漠の花……五
地底の歌……二四五
追われる女……三一〇
盲中国兵……四〇七
平林たい子論……中野好夫　四二三
解説……田宮虎彦　四一九

装幀

恩地孝四郎

恩地邦郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

平林たい子集

第一部

夢はるか

一

市ケ谷駅と靖国神社のあいだの電車通りは、今も三十年前も屋なみが低くて、これというほど燈火のかがやく商店もない。

かぞえ年十八歳の私は、毎晩駿河台の英語学校から羽織袴に下駄ばきで、ぽくぽく暗い靖国神社よこを歩んでかえつてくる。

昼間は丸ノ内の中央電話局で市外通話の交換手見習である。夕方五番町にある信濃館に帰つて夕飯をすましてから、歩いて神田の夜学校に行く。そこで二百人もはいろうかと思われる大教室で講義をきいて、同じ坂道をのぼつてくると、時間は夜ふけの十時すぎになつていた。

ひよつと、うしろから男に肩あげの肩をたたかれて、はねあがつたこともある。

「遊びにいきましよう。」

と、学校からつけてきた学生に声をかけられたとき、ほんとに言葉どおりの意味にとつて、こんなおそく、どこに遊ぶところがあるのだろうといぶかりながら、

「どこに？」

と無邪気に反問したこともある。よむ小説の上ではさまざまな人生を見ききしている大人だつたが、現実の私は故郷の家でなめた貧乏の味以外何も知らない子供だつたのだ。

たまに電車でかえるときには、吊革にぶら下がつて眠つていた。なれない仕事で疲れたうえ、英語学校では、百人以上の大人にまじつて、内職らしい講師の熱のないおしやべりを、一番前の席で一生けんめいに聞きおとすまいと努力する。

しかし、道を歩いている私は、いつも、微笑していた。予定どおり女学校の卒業式と一しよに東京に来たのだ。未来は、桃色の靄に包まれて、はるか彼方に見える。どんなことでも、しようと思いさえすれば成就できる力が、体の中に充実しているのだ。靖国神社側にある小さい焼芋屋の角をまがつた路地の信濃館という下宿が、私の寄宿している家だつた。私の室には、女学校を出て一しよに電話局にはいつた黒田やえ子が、依怙地に夜学のつきあいだけは拒絶して、一人で小説をよんでいる。

やえ子は、私の野暮な袴姿を戸口に見ながら、

「おそいわね。そんなに体を無理していいのかしら。」

「大丈夫。まだこれから十二時まで本を読むんだわ。」

黒田やえ子は、何か話したいことがあるらしい。彼女は誇らしそうに微笑して、

「あのね、井上さんが今までここにいたのよ。」

「へえ。」

私は、何とも言いようのない顔をしていたにちがいない。東京に来てから、まだ一カ月あまりにしかならないのに、やえ子は、交換局の仕事をくだらながつて、毎日、幻滅の歌をうたつていた。そして、この下宿にいた三田かほるという同郷の無名歌人のところにくる大学生の井上と、ぐんぐん近づいていつた。

三田かほるは、故郷の新聞の短歌の投書欄で、私も、名前だけは知つていた青年だつた。アララギ派の島木赤彦の出た諏訪が私の郷里であつたし、土屋文明先生が女学校の校長先生だつたから、多少でも短歌は、かじつていた。

ところが、新聞に出る三田かほるの歌たるや、「雨ふれば水上かけて黄ににごる秋の隅田に物洗ふ女」こんな安つぽい詠嘆調だつた。それに東京に来てみて、隅田川で物をあらう人間なぞあるはずがないこともわかつた。

生意気いつぱいの私は、少なからず三田を軽蔑していた。井上はその三田のグループであつたし、三田に負けず気障なところが見える青年

だつた。ところが、最初に会つた日から、黒田やえ子の彼にたいする態度はひどく積極的だつた。「これは！」と、私は目をみはらずにはいられなかつた。

それいらい、彼女と井上とが、どういう交渉を持つているか、夜学に行く私にはわからなかつたし、何かつらくて知ろうともしなかつた。が、今晩、やえ子がとくに井上のことを言いだしたのは、何か二人の関係に新しい進展があるにちがいない。

二

私は、もうある予感で顔をくもらしていた。

「彼が、どうしても自分の下宿へ来て泊れと言うのよ。どうしようかしら。」

このあいだ、すでにやえ子は、私にちらりとそれを暗示することをうちあけていた。私たちのあいだには、こういう行為を、かならずしも排さない雰囲気が女学校時代からあつた。倉田百三の「父の心配」というドラマも、そうした早まつた思想にたいする父親の子供の世代の心配を書いたものだつたが、作者自身は新しい世代の味方だつた。私たちはその本を貸しあつて、大まじめに討議しあつた。今まで親や学校の先生に教えこまれて信じてきた道徳律は皆まちがいだつたらしい。

ひろい人間生活の中で生活の意味を味わうこともなく親の手から夫の手にわたつてゆく、無事平穏な女の生涯を、むしろ私たちは不幸と考えた。そういう考えから出発して、貞操問題についても、

「それを守ることに一体どれだけの価値があるのか。」

という疑問に到達していた。

こういう疑問を、はげしく口にして、友だちのあいだに同感者をつくりだすのは私だつた。やえ子は、そんな時にやにやしていて、あまり意見をいわないたちだつた。ところが彼女は、私とちがつて、言わずにひとりで実行するたちだつた。

私は、なぜ、やえ子が、井上とそうなつてゆくのに反対なのかを、自分でもじつと考えた。そして、

「いくら、貞操の価値をみとめないつたつて、あんな人とそうなるのは私いやよ。」

と端的に言つた。

「だつて、こんな生活、くだらなくつて、なんとかしないではいられないのよ。」

私は、暗然として、彼女の言分にも同感していた。しかし、私と黒田やえ子との生活は、市外電話局とここだけだつたわけではない。

私が、女学校の卒業を待ちきれなかつたように、卒業式の晩東京に出てきたのは、りつぱな電話交換手になろうという目的からではない。学校のうちから履歴書を出して、仕事をきめてから出てきたのは、用心ぶかい私の生活設計からで、目的はほかにあつた。

私は、上京するとすぐ麹町七丁目の停留所をはいつたところにある、社会主義者堺利彦氏と娘真柄さんとをたずねた。私は、自分の家がまずしかつたために、上級学校に進学することのできなかつた思いを社会機構の問題とからませて、社会を改革することに自分の生きる道を見いだそうと、女学校三年ごろから堅く決心していた。

同行した黒田やえ子と、卒業の前年、二人でこつそり家には修学旅行に行くことにし、学校には休むふりをして、堺氏に会うため上京したこともある。

やえ子は、故郷の駅前の温泉ホテルの入口に勧工場を出していた家の娘で、父親は宿屋の番頭だつた。学校から帰つてくると、夜ふけまで貧しい店の番をして、五銭十銭の利益を家のためにかせぐのだつた。

私も、祖父が、製糸事業を銀相場の下落で失敗したために没落した地主の娘だつた。

学校から帰つてくると、田圃に出ている母の留守番をしながら、小さい雑貨屋を取り仕切つて、十二三のときから大福帳や当座帳をいじりまわしていた。原価計算をして、いくぶんの利をくわえて売値をきめること、罐詰にレッテルを貼ること、樽一ぱいが一塊になつてくる黒砂糖を鉄棒でこわすこと。そのほか、下駄のはなおも立てて売るし、贈物の品物には、紙をかけて水引もむすんだ。

そんな生活の苦労の共通点から、黒田やえ子とは、クラスの中で人にもふしぎに思われる深

い友情の間柄になつた。しかし、私が、まずしい人間の解放運動を生涯の仕事と信じたほど彼女はそのことに熱心だつたわけではない。彼女はいわば私の情熱にまきこまれた形だつた。

私は、よく、堺令嬢の真柄さんに連れられて、早稲田にある高津正道さんの売文社に行つた。そこには、女子大学生や女医専生や、知識婦人があつまつて、ビラまきや示威行列に参加する計画をたてたり、研究会をしていた。婦人が、家庭や世の中でこんなに無力でみじめである原因を、資本主義の害悪とむすびつけて、口々にはげしい言葉で資本主義とたたかうことを誓いあうのだつた。私はこの仕事のために、親も兄弟も一身の安穏もみんな捧げてよいと心にちかつた。若さのあふれるままに、私は泣いて牢獄も貧乏もいといはしないと自分に誓うのだつた。

しかし、そのころは、今のように、だれはばからずそんな話題を声高にしやべれる時代ではない。高津氏の売文社の表には、いつでも私服刑事がうろうろしていて、集会でもつきとめると、すぐに家をとりまいて、一人なし検束する。

私は、ときどき子供をおぶつた高津夫人妙子さんのお供をして、早稲田大学の表門に社会主義の宣伝文書を売りにいつた。そのあわれな、新聞紙をひろげた店さえ三日にあげず警官におそわれて、商品は泥靴にふみにじられたうえ、追いはらわれた。

若い高津氏夫妻さえ、それほど当局から睨まれているのだから、大先輩の堺氏や大杉氏の家はもちろんのことだつた。

私はまだ一度も大杉氏の家をたずねたことはなかつた。が、門前に小屋ができて、刑事が交替で夜昼見張りをしているという噂だつた。

堺氏のところには、見張小屋はなかつたにしろ、夫人の趣味でぴかぴかするほどきれいに磨きこんだ門のくぐり戸をチリチリとあけるのと一しょに、どこからともなく刑事があらわれて、名前を手帳に書きとめるのが常だつた。私はもう、何度も刑事たちと話をして、名をかきとめられる必要もないほど、彼らに顔を知られていた。

しかし、私ほど、黒田やえ子は、社会の改革運動に希望を託していたわけではないから、現実に失望して、大学生の井上に熱中するのも仕方がない。

やえ子は、しかし私の反対気分を見てとると、自分の気持もにぶるらしく、その日はそれつきり何も言わなかつた。

三

私たちは、翌朝、また元気で電話局に出勤する。中央電話局市外課の養成部で、電気の理論や交換技術を練習している私たちの仲間は、およそ二十人ぐらいだつた。交換手といえば、もしもし嬢だの、海老茶式部だのと軽蔑されている時代だつたから、女学校を卒業して交換手を希望するのは珍らしかつた。

養成責任者の石山徳子書記補は、華奢な体に、地味なひさし髪をゆつた二十七八の上品な人だつた。彼女は、よく、

「遠い信州から、よく決心していらしたわね。さびしいでしよう。」

と優しい言葉をかけてくれた。

「いいえ、ちつともさびしくないんですの。」

と、生意気そうに私は、反駁する。心の中にえがいている文学や社会にたいする野心については、絶対に口外しなかつた。

しかし、この養成所内では、べつな意味で私は高慢の出鼻をくじかれることが多い。二十名の同期生の相当な部分が、東京府立の女学校を出ていた。「府立出」と聞くだけで、教官の待遇は別だつた。それほど府立出は権威があつた。

「女学校はどこです？」

ときかれたとき、

「長野県の諏訪高女です。」

と、答えようものなら、相手はかならずそんな山家の猿だつたのかという顔をする。

内なる誇りと自信にもえている私は、そんなとき、相手の軽い侮蔑を、心の中で、軽蔑してかえしていた。そういう気持の自由があるだけでも、女学校出の私たち二十名の雰囲気は、この局とすれば、例外的に自由だつた。

市外課の控室は、真中に、パンの売場があつて、まわりにたたみがしいてあるだけの殺風景な室だつた。そして、うつかり窓ぎわによると、真中に控えている控室監督にひどく叱られる。はじめ叱る意味はわからなかつた。が、ある日、

いつものように胸かけ電話器をかけたまま交換台から交替してくると、二三十名の監督や、男の局員たちがあつまつて、こそこそ話していた。

「何かあつたんですか。」

みんな、言葉すくなく粛然としているなかに、私たちだけは好奇の目をかがやかせていた。と、後からはいつて来た石山書記補が、

「何でも心にあまることがあつたら、かならず打ちあけてくださいね。ほんとよ。私をお母さんのかわりだと思つてね。」

と妙にあらたまつて、しんみりささやく。

「何かございましたの？」

「ええ。」

と書記補は、面をくもらして、

「市内課の子が、一時間ほど前にここから跳びおりちやつたんです。交換手になつたのを、ひどく悲しがつていたというんですけどね。」

「えつ。」

と私たちはおどろいた。が、前途の希望にもえている私には、十五歳の娘がなぜそんなに仕事を絶望的に思いつめて五階の窓から跳びおりたのか、想像することもできなかつた。が、世間がいやしむ交換手という仕事を、自分もいわれなく愧じている娘が多いことは、あらためて考えさせられた。

「はたらくことが卑しいわけはないのに、どうしてこんなにいじけている人が多いんだろう。」

私は、こんなことを見るにつけても、自分の抱く社会主義の考えが正しいと思わずにはいられない。社会主義は働く者を一ばん尊敬する思想なのだから。

さて私は、しいていえば、石山徳子書記補が好きだつた。彼女は、当時の交換手に特有の摺れた風情に染まらずに、いつも自分の見識を守つている。

朝、床の中で目がさめて、灰色な交換局の一日の生活をおもうとき、彼女がいることを思うと、私の気持にかすかな灯がともる。撫子のように、なよなよした彼女が、白い元禄袖の着物に紫紺の袴をつけて、一直線に長くつづいた白衣の交換台の後を歩いてゆく。肩には、書記補の印である浅紫の綬をつけている。彼女の誠実な愛を見ていると思えば、単調で無味な交換局にも慰めはあつた。

私は、女学校時代からふしぎに、女の先輩から愛される娘だつた。女学校で、一年から受持だつた西川先生は、後に南原東大総長の夫人になつた教養高いたつぷりした性格の先生だつた。ピアノも、音楽の先生と一しょに弾くし、英語もできた。それに、文学にたいする見識も一通りでなかつた。

この先生が、あぶなつかしく大胆な私の性格を見かねて、いろいろ助言してくれた。忘れもされない三年生のとき、私は大胆な恋愛小説を雑誌に投書して当選してしまつた。男性からの怪しい手紙がたくさん送りこまれて途方にくれていたとき、西川先生が、投書家になつたら早熟早老して、まつとうな作家になれぬと忠告してくれたことは、頂門の一針だつた。いまもありがたいと感謝している。

私は、女学校から、この交換局へ移るのと一しょに、もう、また、石山書記補という、尊敬と愛の対象を自分で探しだしていた。先方もまた私の存在を心にかけてくれる。私は不満な仕事の中でも幸福だつた。

四

黒田やえ子は、これらさまざまな私の気持の明暗のそばで、皮肉に微笑しながら、だまつて、味気なさそうに動いている。私とちがつて、やえ子は、身なりも物腰も都会的で洗練されていた。

彼女は、野暮な袴をつけるということに、呪いに近い嫌悪を持つていた。しかし、拝命の日から、私たちは、局の幹部に、

「ここへの往復に袴をとることは絶対に許されません。もし街で袴をとつている姿をみつけたときには、相当な制裁がありますから、そのつもりにしてくださいよ。」

と言い渡されていた。ところが、ある日、やえ子は、仕事がおわつての帰りに、控室で、袴をちいさくたたんでいる。

「なにするの。」

と私はおどろいてたずねた。

「こんな野暮なものつけたら、どこにも行けやしないわ。かまわないから心配しないで。」

と彼女は、私をそばにも近づけないいきおいで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

言いはなつた。
「そりやあ、ほかに就職口があれば、何もここにかじりついていることはないけど、東京の地理もわからないのに、今ここを辞めてはちよつと困るだろうと思うのよ。」
ほんとうを言えば、私もこの職場には当惑していた。見習期間が三ヵ月あつて、そのあいだは、一ヵ月に十五円しかもらえない。それは募集の広告にはなかつた条件だつた。下宿屋の払いは、実費で二十三円ときめてあつたが、そのたりない分をどうするのか、まだ決めてなかつた。
一ヵ月ぐらいは、家からもらつてきた金で補充するとしても、来月からの小遣いもおぼつかない。しかし、やえ子のように、仕事がおもしろくないからやめてしまおう、あとはどうにかなるだろうというふうに、捨て鉢になることはできなかつた。
とうとうやえ子は、不承々々にとつた袴をまたつけて外に出た。が、いつたん建物の外に出てから一二町歩いて、ある建物のかげにはいつた。あのころの中央電話局は、広い野原の中にぽつんと立つている建物で、周囲に建物はまばらだつた。彼女は建物のかげにはいると、裾から袴をまくりあげて、羽織の下でうまく帯に見せかけるように工夫をした。前を見ると、海老茶の帯をしめているとしか見えない。
私は、彼女の器用な工夫に驚いた。と一しよに、これほどまで海老茶袴に下駄ばきの姿をきらつている彼女を何とかしてやらなくてはならない責任も感じた。
「私、あなたに相談しなかつたんだけど、近日あの下宿を出るわ。」
「どうして？」
と私はおどろいて訊いた。見習の給料ではたりない下宿料は、下宿屋のお内儀である私の母のいとこのおまささんが、まけてもいいようなことを、このあいだから言つていた。
私は呑気にその好意を受けるほかはないと思つていた。が、私の友だちのやえ子にまで、おまささんが、そういう好意をおよぼしてくれるかどうか、そこまで私は考えていなかつた。ところが、以前、おまささんの下宿の番頭だつた松ちやんが、牛込の穴八幡の近くで、新たに下宿屋をはじめて、信濃館の女中頭だつた、同じ名のお松さんがいつのまにそんな関係になつていたのか、そこの主婦におさまつた。
ところで、その番頭の松ちやんは、以前、国で、やえ子の勧工場の奥にある温泉ホテルの番頭だつたことがあり、やえ子一家とは、なみなみならぬ親密な交渉があつたらしい。そこで、みすみす損のゆく下宿人を二人も抱えるおまささんの迷惑を思つて、やえ子だけ穴八幡の下宿の方に引き取ろうということを申し出たのらしかつた。
その日、私は、やえ子と東京駅でわかれた。やえ子は、例の大学生の井上のところへ行くと言つた。それは、彼女の自由であつたが、私は井上を軽蔑しているので、やはりチグハグな気持だつた。
その晩、とうとうやえ子は帰つてこなかつた。私は、何とかして、下宿のおまささんに、そのことをかくすのに苦慮したが、案ずるほどのことはなかつた。
おまささんは、本業の下宿屋よりも、若いときから病みつきのばくちに忙しくて、折々二日ぐらい家をあける。長いあいだ、ここに働いていた女中頭のお松さんの言うには、
「おかみさんが負けて帰つたときは、すぐわかる。入口から、『何だい。この掃除の仕方は。』とどなりながら、はいつてくる。」
と言つていたほどで、商売は、ほとんど女中まかせで、身がはいつていなかつたのだ。
やえ子は、翌日局を休んだ。そして、夕方、袴を風呂敷で包んだ着流しでしよんぼり信濃館に帰つて来た。
「やつぱり、井上さんのところだつたの？」
と私はたずねずにはいられない。
「うん……。」
と彼女は、答えたきり何も説明しなかつた。
その彼女を見る私の気持は、おののいていた。彼女が、何もそれきり説明しないだけに、どんな想像も私の心の中で跳梁することができる。
彼女は、私の知らない世界にとうとう足をふみ入れた。その世界は、私にとつては、のぞき見することも、立ち聞きすることもできない、鉄の壁で遮断された世界である。

学校の校庭などでは、たやすくお互いの性についての滑稽な想像を笑いながら打ちあけあつたのに、いま彼女がぷつりとそのことについて言わないのが、いかにもその重大な世界をじつさいに見てきた人間の実感だつた。私は自分の責任のように当惑もし、恐ろしくもなつた。

五

その日から、妹のようだつたやえ子は、にわかに姉に見えはじめた。彼女がしやべらなくなつたのも、大人になつた証拠である。彼女はますます交換局の仕事に気のりがせず、私にだまつて外出する。井上の下宿に行くらしい。そのたび、私は救いのない気持になる。

いままでは、こういう行動を肯定していた私なのに、彼女が言葉で論じるよりも先に実行したのをみると、私は自分が何かほかの堅い殻をもつた人間だつたということに気がついた。

二人がこんなことからひどく不安定な気持だつたとき、私たち二人の生活に大鉄槌が振りおろされた。

ある日、私たちが出勤すると、待つていた石山書記補が、二人を別室につれて行つた。

「きようは、大へんかなしいことをお二人に知らせなくちやならないのよ。二人とも局をやめていただくことに、幹部の方々がきめたらしいんですよ。」

私はあきれていたが、そう言われれば思いあたることがある。

二三日まえだつた。私は自分のつかつている交換台をつかつて、麹町の堺利彦氏のところに電話をかけた。交換台の通話は、はるか向こうに陣どつている監督のところにつながるようになつていて、だれが何をしやべつているか彼女がきこうと思えば、プラグをさしさえすればすぐきける仕組みになつている。

私がお手のものの電話で堺夫人としやべつていたとき、監督がじろりと私の方を見た。私はあわててプラグをはずしたが、すでに遅かつたのだ。

局は戦つた私たちに、十五円ずつの手当をくれた。そして、石山書記補の上役のお婆さん監督が控室にあらわれて、

「ほかの人と話をしてはいけませんよ。さ、早く、裏階段からかえつて——。」

と叱咤した。ほんの一瞬間に私とやえ子とは失業者となつて、十五円はいつた包を片手につかんで、裏口から表に追い出された。

「弱つた。どうする？」

「さあ……。」

二人は表に出ると顔を見あわせた。東京に出て来て、まだ二カ月にしかなつていない。気よわいやえ子の目には涙が光つている。

「約束しましよう。信濃館のおばさんには、このことをかくしておこうじやないの。」

「それがいいわ。」

と二人は約束した。翌日から新聞広告を見て仕事さがしである。いつものように朝、家を出て夕方かえつて、夜は私だけ夜学に行く。

おまささんは、金ぶちの老眼鏡をかけて、毎朝出勤姿の私たちをガラスごしにのぞいている。この、私の母のいとこにあたる六十何歳のおまささんのことを、ついでに書く必要がある。

おまささんと、妹のおさとさんとは、私の家から養子に行つた母の伯父の二人娘だつた。妹のおさとさんに、私の村から百姓の養子が行つたけれども、おさとさんは、体に、私の地方で炬燵にかけるこたつかけを巻きつけて、一年も夫婦の交りを拒絶しつづけた。そのあげく、近くの劇場に来た旅役者と逃げてしまつた。

おさとさんが逃げてからも、養子は、なお半年も働いて待つていたというから、その人は、もしかしたら聖人だつたにちがいない。

おさとさんは、結局東京にいる姉のおまささんの所へ流れてきた。もちろん、役者とわかれて、それから何べんも恋愛や結婚をしていたかもしれない。

姉さんのおまささんの方は、女ばくち打ちだつた。ばくちに負けて、着る物までぬいでしまうと、裸で、布団にもぐりこんで、「おまさ死んだ。すぐ来い。」と、国の家へ電報を打つ。

「やれやれ、とうとうおまさも死んだか。」

と、さんざんおまささんになやまされた父親が上京してみると、娘はぴんぴんして腰巻一つで布団にもぐりこんでいるのである。

そこで、叱りながらも、父は娘が生きていたことを喜んで、若干の金をめぐんでかえる。そ

の金をもとでに、またおまささんの活躍がはじまるのである。

ところが、運命は紆余曲折をへたあげく、おまささんに信濃館という下宿屋をめぐむことになつた。

そのころ、おまささんは、妻のある中年男と好い仲になつていた。それが信濃館の持主だつた。おまささんは、強い性格で、細君と別居することを、その人に強要した。

おまささんが、ときどき信濃館へ来て、人もなげにふるまうので、本妻はとうとうあきらめて、子供をつれて、すぐ近くの小さい家に移つてしまつた。

おまささんは、その日から信濃館へ乗りこんで経営の采配を振つた。ところが、旦那がぽつくり死んでしまつた。

おまささんの手に、下宿屋は向こうからころがりこんで来たようなものだつた。はじめに、私は、この下宿屋にまがる角に焼芋屋があると書いたが、じつはこの焼芋屋が、この本妻のほそぼそと経営しているあわれな三文商いの店なのである。

私は、その焼芋屋の角をまがつて、この下宿に出入りするたびに、むざむざ夫と下宿屋をうばわれた本妻の気持を考えた。彼女のあわれさ。また、それほどしたたかであつたおまささんの行為。道徳的にいえば、議論の余地はない。が、泥水を飲んで、家畜のように働いて死んでしまう故郷の百姓の女たちの希望のない生活を呪つて、何とか自分だけは、おなじ運命をたどりたくないと上京してきた私は、むしろおまささんの行為は壮烈に見えた。女が、めそめそ泣かずに、自分の運命を切りひらこうとすれば、こういうことまでしなければならないのかもしれないと、暗然としながらも、おまささんの行為を許すしかなかつた。

初恋

一

私は、たまらない悲哀で、朝、目をさます。

馘られた次の日から、もう電話局に行く用事はなかつた。が、朝七時になると、やはり起きてお弁当をもらつて、家を出なければならない。交換手のシンボルである海老茶の袴までつけて。あまり早く馘になつたので、私はおまささんにそのことをかくすほかない。

黒田やえ子は、松ちやんの下宿屋に移つてから、あまり姿を見せない。私は、毎朝、新聞がくるのももどかしく、三行広告欄を飢えた者のようにがつがつさがす。あるときには、中国人の家庭の家庭教師の求人をみつけた。家庭教師という仕事の必要上、少しでも大人にみせるため肩あげをおろして、アイロンもかけずに着る。が、その求人口もことわられた。

私は、かぞえ年十八だつたが、厳密にいえばまだ十六歳と五カ月にしかなつていなかつた。どこに行つても、二十円か二十二三円の給料しかもらえないのが通り相場である。それで、下宿料を二十円あまり払つたら、小遣いも電車賃も出ないことになる。

二三カ所歩いたが、給料の思わしいところでは、皆ことわられた。そこで、ある日、堺利彦さんの家に行つて、馘られた成行きを話した。すると、堺さんが気のどくがつて、友人の守田有秋さんを紹介してくれた。守田さんは、大正天皇が皇太子として成婚されたとき、「権力を以て、非力な娘を無理強いに皇太子とめあわす」という意味のことを、自分たちで発行している新聞にのせたため、山川均と一しよに不敬罪に問われたことのある、古い社会主義者だつた。

氏は出獄後、ドイツに行つて、前大戦後の動乱していたドイツに滞在した。そのとき知りあつた中年のドイツ婦人エリス・アッカーマン夫人を連れて帰朝した。二六新報の編集長の仕事のかたわら、そのアッカーマン夫人を社長に、友人と資本を出しあつて京橋の第一相互館に、ドイツ書籍とドイツ雑貨を売る店を開いていた。堺さんは、その店になにか仕事はないかと、守田さんに手紙をつけてくれたのだつた。

ある日、守田さんの指定する時間に、私は京橋角の第一相互館の日独商会を訪ねて行つた。守田さんは、あたたかい重厚な風貌の持主で、ドイツ語が日本語同様にうまかつた。

氏は、店に腰かけて本を読んでいる三十二三

のアッカーマン夫人を呼んで、私を中二階につれて行つた。彼女は、大きい目をくるくるさせて、私を一目見てから、ペラペラと守田さんに何か言つた。ときどき会話にはさまる「ダス・メッチェン」というのが、私のことであるらしい。

「ちようど、女店員をほしいと思つていたところでした。給料は三十円です。よかつたら、あしたからいらつしやい。英語はできますね。」

「ええ少し……。」

私は嘘をいつていた。ふつう「少し」という謙遜語はたくさんということである。が、就職のためにこのくらいのはつたりは仕方がない。当つてくだけろ、と私は度胸をすえていた。のちに、英米人の客があるたび、私がさしむけられて、何度か顔から火を出すことになつた。が、それは私がいついた後のことで、私の嘘がそのころはもう笑い話として宥されていた。

さて、私はアッカーマン夫人にも頭をさげた。彼女は、どれだけ私に横文字が読めるか試すために、一冊の本をとつて表紙をさした。

「あなた、これ読んで……。」

アッカーマン夫人が示したのは、ベートーヴェンの伝記らしい。私がかろうじて、「ベートーヴェン……」と読むと、それで試験はパスした。

「給料の三十円はやすいと思つています。が、この経営ではそれ以上出せませんから、マダムがほかに、収入の道を考えていると言つています。」

「はあ。」

それは、週一回、アッカーマン夫人がキリンビールの社長さん邸にドイツ語を教えに行くお供をすることだという。

私は守田さんと夫人の好意に感謝した。

二

翌日から私は、日独商会の女店員となつた。店には、アメリカ帰りの板垣さんという若い支配人のほか、夜学に通う十五歳の大山少年と、二十八歳の神島青年とがぼんやり腰かけて表通りを眺めていた。

お客は、学者や音楽家や医者などばかりだつた。が、マルクの暴落時代で、本がひじように安いため、ドイツ語本の買人気があがつているらしく、値段をしらべにくる客が七八人ぐらいは、いつも棚の前に立つていた。

私は立読みの客のうしろに立つているのはおろかしいと思つて、椅子に腰かけて本を読むことにした。こういうことは、店番をする店員として許されないはずだが、私にはそんな常識はなかつた。そばでアッカーマン夫人が、一日中本を読んでいるので、私も読んでよかろうと思つていた。

彼女は、きわどい写真ののつている法医学の本を大てい読んでいた。暴行殺害された女の死体の、ズロースがナイフで切りさかれている無惨な写真のある本など朝から晩まで読みふけつている。

キリンビールの社長邸にドイツ語の講義に行く日には、彼女は前の晩から髪にクリップをした。ドイツ夫人は、もうこのころからクリップを使つて、下げた前髪にリングをつくつていた。

彼女はついでに私の素足をさして、

「あなたシロない?」

と足袋はないかときく。なければ買つてやろうという意味である。私は、あるけどはかないのだとことわつた。大邸宅の表玄関から素足で訪問するのも、またよかろうと、私は皮肉な気持だつた。

私は生まれてはじめて、いうところの大資本家の邸を目のあたり見ることになつた。りつぱな門のなかに長い植えこみがあつて、式台のついた大玄関に衝立が立つている。

アッカーマン夫人が呼鈴を押すと、たちまち、その衝立のかげから着物に帯つきの女中が、七八人も電気仕掛のようにばらばらとあらわれて、行儀よく手を突く。そのうしろから、新婚のうつくしい夫人が、耳かくしで出てきて、やさしいフランス語で、アッカーマン夫人に愛想よく歓迎の言葉をかける。アッカーマン夫人のあとから、足袋もない素足に下駄ばきの私が、どうどうととおる。

私は、二十畳敷の大広間の真中にぽつんとすわらされて、稽古のおわるのを待つていた。

その三間もあろうかと思われる床の間には、結婚のときの祝いにもらつたらしい、紅白ちり

めんの布をたたんだ鯛の置物や高砂の翁媼の島台などが、何十個となく、所せましとかざつてある。

どんな盛大な結婚式を、この二人はあげたのだろう。私には、見当もつかない。

私は、そのころよく出席する早稲田の高津正道さん宅の暁民会の会合で、堺利彦さんの娘さんの真柄さんと一しよに、革命歌を合唱した。

「叫！　国民の膏血に、玉杯のふち溢らせて、短夜かこつ歓楽の、宴を破るへきれきや、自由を叫ぶ民衆の、声に乱るる羽衣の曲……」

私はこの歌を思い出しながらその盛大な結婚式を想像する。私の心の中には、金持に好意をもてない観念が、ひたむきに燃えあがつている。だから、玄関に、アッカーマン夫人を出迎えたり送つたりする社長と夫人が、あんがい気よわそうなインテリ型であるのが、意外で、むしろ物たりない感じだつた。

たまには夫人が出てきて、私に声をかける。

「少しかわつた娘さんね。絵でも習つてらつしやるの。」

「いいえ。」

と、私は大胆な物思いにも似ず、はにかんで、何もいえない。

私には、この夫人などにはとても打ちあけられない目的がある。

私が東京に来たのは、近所となりのみじめな百姓女の運命を、自分だけはどうしてもたどりたくないという切なる希いからだつた。女学校卒業式の晩、上京する時、汽車の窓口まで、着物の尻端折りにゴム靴といういでたちで、チッキに出す行李を背負つて送つてくれた父も、何か私の行く手に女としてはかわつた運命を予感していたらしく、

「たとえ女賊になるにしても、一流の女賊になるんだぞ。」

と小さい声でささやいた。

私は「ええ、ええ。」と殊勝らしく父にうなずいていた。世間のせまい父には、女が社会ですぐれた才能をしめす方法がわからないので、社会にみとめられるには、講談の姐己のお百か鬼神のお松のようにでもなるほかないと思つていたのだろう。私に「タイ」という名前をつけたのも、私の生まれた当時・桂公の妾として、女ながら政治にかげから口を出していたお鯉さんの「鯉」という名ににせて、彼女の幸福にあやからせようという希いからだつた。

ところが私は、前から女賊ならぬ社会運動と文学との目標をはつきり胸にいだいていた。が、父には、それをひたがくしにかくしていた。そのころ社会主義者といえば、箸にも棒にもかからぬ悪人のように世間はあつかつていた。父にそれを打ちあけたら、講談に悪名をのこした毒婦、女賊に私がなるよりも、何十倍か悲しがるにちがいないと、私は知つていたのだつた。

――何はともあれ、こんなふうにして私の女店員生活ははじまつた。

私は、小学校のころから、家の小売店の番をして、石油から砂糖から下駄からコップ酒まで、けつこう商つていたので、商売はあんがい上手だつた。日独商会は、たちまちのあいだに私を信用して、夜、店をしめたあとの鍵を、私にあずけることにした。そのおかげで、私は夜学をやめなければならなくなつた。

そのころ私は、おまささんのところを出ることになつた。というのは、堺さんのところに頻繁に出入りするために、信濃館に特高刑事が来て、ときどき私の行動をたずねるようになつた。おまささんは、国の父にそのことを言つてやりそうな気配が見えたので、私はいたたまらなかつた。

おまささんも、自身女賊ではないにしろ、女としては考えられぬほど大胆な道を歩んできた人であつた。が、私が堺さんのところに出入りすることにたいしては、絶対に反対して、きびしい干渉をした。私は、父に相談せずに、堺さんの令嬢真柄さんと、堺家に出入りする中宗根貞代さん夫妻と一しよに、柏木に一軒もつて、真柄さんと机を並べて暮らすことにした。

一しよに上京した黒田やえ子は、そんな事情もからまつて、松ちゃんがつれて行つたきり、みんなで私に会わせないようにしていた。例の大学生とのあいだはそれつきりらしく、やえ子は、なやんでいたが、そのなやみすら私には打ちあけなかつた。そのまま彼女は、松ちゃんにあずけられて、無理じいに国にかえされた。

三

――ところで、ある日、一人の詰襟服の青年が、日独商会に守田さんをたずねて来た。そのとき守田さんは、まだ店に来ていなかつた。彼は、守田さんにたのまれた調べ物について報告するのだと言つて、待つていた。守田さんは、毎日神田の今川橋の二六新報社からまつすぐバスにのつて、ここにくることになつていた。

あまり、守田さんの出勤がおそいので、私は青年が気のどくになつて、店の表に出て、守田さんの来る方角の通三丁目の方を、眺めたりした。意識しなかつたけれども、私は、一目見たときから青年に好意を感じていた。

店の中にもどつてくると、青年が、

「すみませんが便所の紙をください。」

と言つた。私は笑いだした。アッカーマン夫人にも、その言葉がわかつて、笑いながら何か紙を出してやつた。私は、その飾りけのない一言から、ますます青年をとくべつな注意で見るようになつた。一目見たときから、どこかかわつていると思つたが、やはり彼は、ひどく世間ばなれがしている。彼は、みじめな古い詰襟服を着て、どたどたの編上靴をはいていた。が、垢はついていなかつた。

青年が、二三回守田さんをたずねてくるうちに、私たちはだんだん親しい話をするようになつた。話してみると、彼がやはり社会運動を志している人であることがわかつた。

彼は、つい近ごろまで熱心なクリスチャンで、満州の教会では有名な模範青年だつた。両親はすでになく、兄の世話になつていたが、兄が酒を飲むのを目ごろクリスチャンとして苦しんで見ていた。あるとき、心を決して、兄のために祈りながら、嫂が買つておいた一升瓶の酒を流しに全部流してやつた。彼は、これが、神の旨にそつて兄の魂を救う道だと信じて疑わなかつた。ところが、満鉄社員の兄は、会社から帰つてそのことを聞くと、火のように怒つて彼の首をしめた。

「アメリカの酒なら流せ。フランスの酒なら流せ。日本の酒は、畏れ多くも天皇陛下が許したもうて造つている酒だ。それを流すお前は国賊だ。」

と言つて、息がつまるかと思うほどしめる。じつをいえば、彼は兄と腹異いの弟だつた。兄は、幼いころから事ごとに弟に冷たかつた。父からもらつた財産を分けるのを惜しんでいたのだ。彼は、そのとき以来決心した。勤めていた会社の同僚や先輩に祝福されて、神学校にはいるため、兄の家を出て東京にやつて来た。が、東京で知つた新しい友人たちの影響で社会主義を知つてから、神学校入りをやめてしまつた。彼はしかし、いわゆるアナーキズム（無政府主義）を信奉して、堺さんなどのボルシェヴィズム（過激主義）と反対だつた。彼の名前は伊東といつた。

彼は、そんな生立ちだつたから、さしたる学歴もなく、今は、満州時代の貯金も使いはたして、月島にある友人の部屋に居候しながら、守田さんの仕事など手伝つている、いわば失業者だつた。

ところが、彼がこんなあわれな、なんの特権も後楯もない孤独な人間であることに、私の心はひかれた。

今までの結婚は、財産や学歴との取引きでおこなわれた。そんな結婚を軽蔑して、どうしても世間一般の女の運命をふみたくないと心にきめていた私は、伊東が世間の水準と正反対に無力な青年であるということに、かえつて心を動かされていたのだつた。

彼は、だんだん足しげく私の店にたずねてきた。また店をしまう時間に私を待つていて、柏木の寄寓まで送つてくるようになつた。

もつとも、そのころ新宿の市電終点から柏木までは家がまばらで、出歯亀が出たという暗い空地を通らなければならない。私は毎晩十一時ごろ自分で店を閉めてから、あずかつた鍵を持つて、終電車の吊革にぶら下がつて眠りながら、新宿終点まで帰るのがつねだつた。

ある晩には、終点から二三町ぐらいの質屋の門の中から、強盗らしい男があらわれて、

「声を立てるとひどいぞ！」

とすごい声でおどかしながら私の前に立ちはだかつた。その時は、折よくうしろから電車を降りた通行人が来たので、その親子連れと一しょに帰つてもらつたが、ほとんど毎晩、私は恐ろ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com